

東弘寺・願興寺

善性ゆかりの寺に東弘寺がある。善性は利根川と鬼怒川に挟まれた飯沼という広大な沼に面する落田に住んでいた。性信のいた横曽根も飯沼に面しており、2人は早くから親鸞の弟子となっていた。

善性は信濃の豪族井上氏の一族とされているが、東弘寺では後鳥羽上皇の第3皇子で、比叡山で出家した周観であるとする。周観は比叡山から諸国行脚に出て下総の国主豊田治親のもとで留錫していた折り、親鸞と出会い、他力撰生の教えにあずかって法弟となったと伝えられる。

豊田治親の居城豊田城に親鸞が一泊した時のこと、薬師如来の夢告があった。

「当地は、念仏宿縁深き所、道場を建てて発願せよ。これを授ける。」

目を覚ますと、親鸞の枕もとに一枝の楊柳があった。親鸞は大変喜んで、その枝を庭前に挿すと、一夜にして丈余になった。豊田治親もこの奇瑞に触れて直ちに法弟となり、良信の法名が授けられた。かくて治親は近くの倉持大高山に念仏道場を建て、善性はさらにその道場を寺として東弘寺と名づけた。善性が親鸞の稲田草庵(浄興寺)を継ぐに当たって、東弘寺は治親に譲られた。

楊柳の霊夢は沼沢開拓に柳を用いたことを暗示している。また沼沢開拓と深い関わりを持つ逸話がある。

当時、飯沼は岡田、猿島、結城三郡にまたがる広大な沼であった。ある年の中秋の夜、親鸞は門弟たちと飯沼に船を浮かべ名月を賞した。その時、親鸞が何気なく、

「この沼に島があれば、さらに風流なのに。雁も翼を休める島を欲していよう。」

と呟き、

「雁島や今宵の月は丸裸、雲も霞も弥陀に取られて」

と詠んだ。

ところが、その翌日、里人が沼を見ると、小山のような島が沼の中に出現していたのである。以来、誰言うともなく、この島を雁島と呼ぶようになった。東弘寺は初め雁島の近くにあったことから、この伝説も飯沼干拓を目指してあり人たちの願望と、親鸞の奇瑞が巧みに交叉したものであろう。飯沼にまつわる話はまだある。

飯沼に面する岡田郡の地頭・稲葉勝重は下妻の蓮位の従兄弟であったことから親鸞の門弟となり、一心房という法名を賜った。一心房と親鸞は本願念仏弘通のため、東弘寺近くの倉持の高台に一字を建てたいと発起した。

ところが、四方は一面の湿泥地である。牛や馬が入れず、資材の搬入が困難を極めた。と、どこからともなく一頭の大きな牛が現れ、湿泥地を厭わず土を運んで埋め立て、巨木を運び、石を背負って資材を運び上げたのである。牛は全ての資材を運び終わると、傍らにある飯沼に入り、たちまち一株の枯れ木に姿を変えてしまった。

親鸞は、この牛を仏の加護として、この寺を牛願寺と命名したのであった。

牛願寺は小高い台地にあるが、周囲は沼沢であつたらしくその開墾の跡がそここに偲ばれる。東弘寺も牛願寺も、湿原開拓に挑んだ人々の厚い思いが託されて成った寺であることは言うまでもない。(武田鏡村)